



教育・学ぶ

母、妹…家族の人生に陰

相談できず、状況が悪化

「お医者さんに診てもらわなければならないですか？」

「本人がとにかく拒否するんです。トラウマになっているんだと思うんです」

昨年12月18日午後、宇都宮市のとちぎ福祉プラザ。引きこもり当事者や家族を支援するNPO法人「とちぎベリー会」(斎藤三枝子理事長)の月例会に、県央の70代後半の母親と、40代後半になる長女が参加した。2人はグループミーティングで、女性の長男について悩みを打ち明けた。

長男は20年間、自宅に引きこもっている。大学卒業

後、県内の流通業に就職したが、人間関係でつまづき退職したのが契機となった。

学生時代までは友人に囲まれ、朗らかだった長男…。もう50歳を過ぎてしまった。

同月初旬、母親は長男がトイレに入った際に電

開かない扉

とちぎ・長期化する引きこもり

1

高年齢化

話をかけた。小声で、月例会参加を斎藤理事長に伝えた。

長男は周囲の言動に敏感で、電話すら自由にできない。決まった手洗いやうがいの方法を強要し、監視する。

母親は罵声に身を縮ませ、長女は態度を硬化させていった。

母親は1年ほど前から服薬している。動悸が激しくなったためだ。医師には「別々に暮らさなければ収まらない」と言われた。

長男は引きこもり始めた当初、家族と一緒に食事を取ることもあった。が、次第に生活が昼夜逆転し、家族への一言、暴力が激化した。

1997年春、病気を患っていた父親に激しい暴力を振るった。母親と長女はやむなく、長男を入院させた。

「長男自身は治療の必要があるとは思っていない。無理に入院させたことが、病院への不信感につながったのか。厳しく対応した自分が悪かったのか」。母親は自問した。

情報はなく、どこに相談したらいいのか分からなかった。20年も長引くとは予想もしなかった。80年代に社会問題化した「引きこもり」。思春

期の問題ととらえられていた時代だった。

「父も亡くなり、自分たちも年を取った。これから先、今までの別の意味で厳しさが増す。八方ふさがりになるだろう」と長女。40代後半になったが、結婚に二の足を踏んだ。家族の状況を理解し受け入れてもらえない不安があった。

長女は母親に言った。「この問題を丸投げして逝ってしまったのは困る。私にも私の人生がある。一生兄のことで終わるのはつらい」

× ×

内閣府の実態調査で全国に70万人いると分かった引きこもり。思春期の問題と思われてきたが、平均年齢は30歳を超え、長期化・高年齢化が深刻度を増している。60代に突入した親も多く「親なき後」のわが子の行く末を案じ苦悩する姿が浮かび上がる。県内の実情、行政の課題などを描く。(阿久津信子)



20年間引きこもる60代の長男について、悩む70代後半の母親(左)と長女(右)＝2011年12月18日